
さとり

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さとり

【Nコード】

N4373W

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

獵師の吉兵衛は山の中でさとりという妖怪と出会った。さとりは彼の心を全て読んでしまう。そのさとりが言うこととは。日本の妖怪を題材にした作品です。

第一章

さとり

吉兵衛は猟師である。この日も山に入って狩りをしていた。

そうして獲物を獲っていた。兎に狐、それに雉。そうしたものを手に入れていた。

しかし気付けば山の奥深くに来ていた。そこは彼が今まで殆んど来たことのないまでに深い場所だった。

周りは木ばかりだ。他には何も見えない。しかし彼はその木々の中でも落ち着いてだ。とりあえずは適当な場所にたまたまあった石を椅子にして座ってだ。それから小枝を集めて火打石で火を点けて暖にした。

兎を捌いてそれを炙って食べながらだ。彼はこれからのことを考えていた。

「さて、まずは腹を膨らませて」
それからだというのだ。

「もう遅いしな」
見れば周りが暗くなろうとしていた。夜が近くなっている。
「ここで夜を過ごして。朝になって帰るか」

確かに殆んど来たことのない場所だ。それでもだ。
知らない場所ではない。帰ることはできる。それで落ち着いていたのだ。

とりあえず食べるものを食べてそれから寝ようとした。しかしだった。

ここだ。不意にだった。

彼のところにだ。やたらと大きな、しかも服は着ておらず全身黒い濃い毛に覆われたものが出て来た。一目で人間ではないことはわかった。

しかし何者であるのかはわからない。吉兵衛はそれを見てだ。ま

ずはこう思った。

（妖怪か？）

こう心の中で思うとだ。すぐにだ。

その濃い毛の、顔だけはとりあえず人間に見えるものがだ。彼に
こう言ってきたのだ。

「今わしを妖怪だと思ったな」

「むっ？」

「そう思ったな」

こう彼に言ってきたのだ。

「そうだな」

「その通りだが」

吉兵衛もこうそれに答える。

「わかったのか」

「そうだ。そうだ、わしは妖怪だ」

自分から言ってきたのだった。

「わしはさとりという」

「さとり？」

「そう、わしはさとりというのだ」

「さとり？」

「まあ詳しい話は後でだ」

さとりは話を一旦切ってきた。そのうえでだ。

彼はだ。吉兵衛に対してこんなことを言った。

「美味しいのだな、その兎は」

「それもわかるのか」

「うむ、わかる」

こう彼に話す。彼の横に座ったうえでだ。

「そうか。兎は美味いか」

（食いたいのか？）

吉兵衛はここでこう思った。

（この兎を。それなら）

「それはいい」

吉兵衛が兎を分けようとしたそこでだった。さとりはだ。
こんなことをだ。彼に言ってきたのだ。

「わしは肉は好まぬ」

「むっ？」

「兎も鳥も食わぬ」

そうだというのだ。

「魚は食うがな。後は山菜や果物を食うのじゃ」

「そうなのか」

「そうじゃ。だから兎はいい」

吉兵衛が言う前にだ。こう言ってきたのだ。

「御主一人で食うといい」

「それでいいのか」

「わしの食うものはここにある」

すぐにだ。さとりはだ。

自分の毛と毛のからだ。あけびを出してきた。栗や柿もある。

そうしたものを出して食べながらだ。また吉兵衛に話すのだた。

「たんとある。だから気にするな」

「そうなのか」

「そうじゃ。とにかくわしは肉は食わん」

（ではじゃ）

吉兵衛は今度はこう思った。

（わしも食わんのか）

「ははは、人を食うというのか」

また言って来たさとりだった。

第二章

「わしはそんなことはせん。人なぞ食わんぞ」

「また言うか」

「人なぞ食ったこともないし食おうとも思わん」

「これがさとの今度の言葉だった。」

「何度も言うが肉は好かん。果物や山菜の方がずっと美味いわ」

「だからか」

「あと茸もよい」

「山にはつきものだ。それもいいというのだ。」

「それとも何かわしが人を食う様に見えるか」

（見えるな）

吉兵衛はさとの言葉を受けてまた内心でこう思った。

（そんな外見ではな。熊よりもでかいししかも妖怪ではないか）

「ふむ。熊か」

さとりは吉兵衛の考えをそのまま述べた。

「妖怪は人を食うか」

「食わぬのか？」

「大抵の妖怪は食わぬ」

「そうだというのだ。」

「それに熊にしてもじゃ」

「熊もか」

「人は食わんぞ。狩られて返り討ちにすることはあってもな」

「それもないというのだ。」

「少なくともこの辺りの熊はそうじゃ。他の熊は知らんがな」

「熊は人を食わんか」

「鬼熊という奴は別かも知れんが」

「この妖怪の名前も出た。」

「あれはな」

（鬼熊とは何じゃ？）

「熊が長生きして妖怪になったものじゃ
それだというのだ。」

「里に下りて馬とかを攫って食う。力もかなり強いし妖術も持っておる。」

「そうした妖怪もいるのか」

「この辺りにはおらんがな」

また話すさとりだった。

「まあこの辺りにおけるのは天狗と他は大したことのない妖怪達だけじゃ」

「そんなにおらんのか」

「少なくとも暴れ者はおらん」

そうだというのだ。

「御主達にとつては幸いなことにじゃ」

「ならいいのじゃがな」

（だがこの者）

再び考えた吉兵衛だった。

（何故わしのがわかる）

「おお、そのことを考えたか」

何かにつけた。言うさとりだった。

「わしが何故御主の考えていることを言うのかだな」

「それじゃ。どうしてじゃ」

「わしはさとりじゃ」

その己の名前を言ってきたのであった。

「さとりじゃ。つまりじゃ」

「さとののか」

「左様、わしは人の心が読める」

そうだというのだ。

「例えばわしを見つけたそうと来た者の心が読める」

「ではそういう相手にはか」

「姿を見せぬ。わしはそういう者じゃ」

「そうだったのか」

「その通り。それでわしは危険を逃れることもできる」

「便利じゃな」

「便利と思うか」

「違うのか？」

吉兵衛は兎の肉を食べながらさとりに尋ねた。

「人の心がわかる。では何でもできるではないか」

「だがそうでもない」

さとりはここでいささか困った顔を見せた。

「人の心がわかるとじゃ」

「だからいいことではないか。何でもできるな」

「違う。人の心はよいものもあれば悪いものもある」

このことを話すのだった。

「その悪いものが厄介なのじゃ」

「悪いものが？」

「うむ。例えば御主は」

その吉兵衛を見ての言葉だ。彼のその顔をだ。

第三章

「手に入れた狐の毛皮をじゃ」

「むっ、わかるか」

「それをかなりふっかけて売ろうと思っておるな」

「その通りじゃ」

ありのまま答える彼だった。

「大した毛ではないがそれでもじゃ」

「そうじゃな。他にもある」

「他にもか」

「そうしてふっかけるのなぞまだ可愛いものじゃ」

それ以上にだというのだ。

「人を殺そうだの。奪おうだのな」

「そう考える者もおるのう」

「これがおる。そうした心を見るとじゃ」

どうなのかだ。さとりは話していく。

「嫌になつてしまうものじゃ」

「嫌になるか」

「口では綺麗なことを言っても実は全く逆のことを考えている」

さとりは実際にその顔に嫌悪を見せている。何時しかだ。彼の顔はそうなっていた。

「見るものではない」

「人の心はか」

「実を言えばだ」

ここでさとりは話を微妙に変えてきた。

「わしは元は人間だった」

「そうだったのか」

「仙人になろうと思い修業していたのだ」

「それでどうしてまた妖怪になったのだ？」

「うむ、仙人になる為の修業を積み
そしてだというのだ。」

「不老不死になり様々な術も覚え」

「その術の中にか」

「そうだ。人の心を読む術も身に着けた」

「そうだったというのだ。」

「しかしそれでな。人のそうした悪いものも見えてしまいだ」

「嫌になったか」

「仙人でもだ。同じだった」

「そのだ。彼が目指したその仙人もだというのだ。」

「仙人も結局人間だな」

「そうなのか。達観したとかそういうのはないのか」

「中々ない。やはり煩惱を取り除くことも悪いものを捨て去ること
もだ」

「難しいか」

「非常に難しい」

「まさにそうだというのだ。」

「できている仙人はほぼいなかった」

「そうしたものを見てか」

「わしは仙人になることをその手前で止めた」

「そうしたというのだ。」

「それで山に籠もり今の様に暮らしているのだ」

「妖怪としてか」

「そうなのだ。人の心が読めることは確かに多くのことがわかる」

「これは事実なのだという。さとりも否定しない。」

「しかしわからなくていいものまでわかってしまうのだ」

「そうか。だからよくないのか」

「うむ。人の心は厄介だ」

「さとりは悲しい顔で話す。」

「決していいものとは限らない」

「悪いものも多くあるからこそ」

「少なくともわしはそうしたものを見たくはない」

だからこそ山に入り妖怪にもなったというのだ。もっとはっきり言えば妖怪と呼ばれる様な存在になった。そうだったというのである。

「そのことを話しておく」

「わかった。難しいのだな」

吉兵衛は瞑目する様に目を閉じてから述べた。

「人というものはな」

「難しい。実にな」

「ではあんたはこれからこの山にいるのか」

「そうする」

そのことはだ。もう決めたというのだ。

「ここで一人で生きていく」

「そうするか」

「ではな。おそらくもう会うことはない」

さとりは自分から別れの言葉を言ってきた。そして腰をあげてだ。

吉兵衛に顔を向けてだ。寂しい声で告げた。

「わしは一人でいたいのだからな」

「そうするか。ではわしはだ」

「御主は？」

「もうここには来ないようにしよう」

そのさとりを見上げて言う。彼はまだ腰を下ろしてそのうえで兎の肉を食べている。そうしながらさとりに対して言葉を返したのである。

「あんたが人と会いたくないというのならな」

「済まないな。それではだ」

「お別れだな」

「さらばだ」

こう最後の言葉を交えさせてだ。さとりは吉兵衛の前から消えた

のだった。吉兵衛は兎を食べ終えると火を消してその場を離れ別の場所へ寝た。それから里に帰った。そしてそれからこの辺りに入ることはしなかった。さとりは一人山の奥に入り人と会うことはしなかった。最早彼がそこにいることを知る者もないしそこに入る者もない。そしてそのこと自体がだ。さとりの望んだことだったのだ。

さとり

完

2011・5・23

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4373w/>

さとり

2011年9月5日03時27分発行